『其處まで送つて行きませうか』

かう言つたかれは、不圖あることを思ひ出して、『よく貴嬢を二人で送つて上げたものでしたね。まだその時から一年と少し經つてゐやしない。』

『本當にね』

秀夫の送つて來やうとするのを見て、『もう本當に澤山ですよ。それでもかうしてお目にかゝれて、私滿足でした。勇んで、發つて行きますわ』

二人は門の處まで行つた。

『ぢや、左樣なら』

『左樣なら、お機嫌よく發つていらつしやい。私はお見送りは致しませんから』

『えゝえゝ……ぢや、本當に左樣なら』十間ほど行つた處で、女は振返つて見た。男はまだ其處に立つてゐた。

秋の空は高く鮮かに晴れてゐた。

女の不意の訪問は、落附いたかれの頭を再び根柢から動かして行つたやうなものであつた。二時間！互に昂奮して、別に細かい話もしなかつた。しかし二時間の前と後とでは、心の狀態が夥しく違つてゐた。

かれは女に別れて、斜坂の紅葉の間を縫ふやうにして歩いて、其僦家の緣側のところに來た。

其處には夕日に照された籐椅子がかれを待つて居た。

かれはそれに身を投じて、頰杖をして、簇つて來るいろ〳〵な思を一ところに集中させやうとした。

傷痍は再び開いた。思ひ出はそれからそれへと續いた。戀に夢中になつた自分が此處にも其處にも居た。郊外の林の中の樂しい私語や、廣い野に下りて行く坂の上の路や、波打際に沿つた海邊の夜の逍遙や、さうした歡樂の追憶が、卷物にした繪のやうになつて眼の前を通つて行つた。

學生生活、都會生活、無邪氣な熱心な一途に學問に熱中した心の狀態から、忽ち引摺られて行つたことが殊に歷然と眼の前に見えた。女からの手紙、初めての物語、夜の闇路、邂逅、郊外への散歩、林の奥の菫の白い花。

――それが何んなに强くかれを引張つて行つたか。かれはその戀に全き力を擧げた人であつた。體も魂も全く其の黑い眼には魅られて了つた人であつた。その人が二年の年月を經て、魂のぬけたやうな人になつて、かうして籐椅子の上に身を横へて居る！

今日訪ねて來た女の心をかれも前から知つて居た。かの女は自己の戀を犧牲にした女、犧牲的に二人の戀の爲めに盡力しやうとした女である。それが長い間二人の戀を彩つて居た。しかしそれももう殘りなく過ぎ去つて了つた、完全な過去になつて行つた。

一人は田舍に、一人はやがて海外に、一人はかうして都會の郊外に。

『一生別れるやうなことはないやうにしませうね』かう言つて、三人して手を握つたのは、溪流の見える山の溫泉宿の欄干の處であつた。『貴郎達の戀さへ成就すれば、それで私は滿足よ』その女はいつもかう言つては涙を流した。

籐椅子に凭りかゝつたかれの姿は、暫し浮き出すやうに夕日の影の中に見えて居た。かれは種々の悔恨やら追懷やらの胸に簇つて來るのに堪へか

ねた人のやうに、長い間額に掌を當てゝ居た。

其夜、かれはさびしい心をその町の橋の袂のレストウランに運んで行つた。

其處でもかれは思ひがけない新しい光景に邂逅した。

晝間はしんとして滅多に客も無いやうな二階の一間に、其夜は珍らしく客が澤山居て、酒を飲んだり議論をしたりして居た。農科の學生が多かつた。

酒に醉つた赤い顏、髪を長くした蒼白い顏、いが栗に短かく刈つた頭、大學の正帽を被つた丈の高い男などが、卷煙草の烟り一杯に籠つた一間の一隅に集つて、薄暗いランプの光に照されてわい〳〵騒いで居た。

『Brabo！』

かう大きな聲を立てる男もあつた。

『My littlu queen！ ビールを持つて來て吳れ』

群の中の一人がかう言ふと、例の娘はビールの罎を二三本下から運んで來て、コロップを拔いて、彼方此方から高くかゝげる洋杯にビールをついで廻つてゐた。

晝間と違つて、娘は綺麗に化粧をして、白いエプロンをかけてゐた。

あとからまた客が一組入つて來て、空いた卓に相對して坐つた。

『今日は忙しいね』

皿を運んで來た時、かうかれは娘に向つて言つた。

娘は笑つて見せた。

『いつもかうかね、夜は。』

『え、夜は忙しう御座んす』

かう言つて、すぐ向うの方に行つて了つた。

人々は娘を片時も多く傍に引きつけて置かうとするやうに見えた。

かれは暗いランプの下で、パンを手で割いたり蝦のフライをナイフで細かく切つたりしてゐた。

學生の群では、猶頻りに何か騒がしく議論らしいことを言つて居たが、突然、『何だ生意氣だ！』といふ高い癇走つた聲がしたと思ふと、ビールの罎やコップや皿の落る音が凄じく四邊に響き渡つた。見ると大きな男は、立上つて他の一人の頭をポカポカなぐつてゐた。周圍の人達は頻りにこれを抑へやうとしてゐた。

『生意氣を言ふな！おい、離せ』

その途端に、別なテーブルの上の皿が五六枚また凄じく落ちる音がした。

下から家の主人やボーイが飛んでやつて來た。

二人はやがて引離された。

打たれた方の男は、蒼い顔をして、卓を前にして睨んで立つてゐた。

娘はかれの卓の傍に來て居た。

『本當に、杉田さんは、亂暴をするんで仕方がないんですよ』

『杉田ッて言ふのは、あの大きな男かえ。矢張大學生かえ』

『え』

『打たれた方も矢張大學生かえ』

『え』

こんな話をしてゐる中に、多勢の人達は皆な出て行つて跡は靜かになつた。

『私、本當に吃驚してよ。仲よく何か話してゐたのよ。と、急に、生意氣な奴！とか何とか言つて杉田さんが打ちにかゝつたんでせう。私、本當に吃驚した！』娘は笑ひながらこんなことを言つた。

暗い夜道を歸つて來たかれは、一層さびしい心持に閉されてゐた。

六

さびしい日が續いた。

野は段々寒くなつて行つた。木枯が凄じく廣い野を吹渡るやうな夜もあつた。落葉は路傍にガサコソと音を立てた。

收穫はいつの間にかもう大抵すんで了つた。大根や菜が徒らに青々と繁つて居た。かれが出かけて行つて木の葉の私語に聞惚れた林も、今は、もう疎になつて、下に生えた笹の葉ばかり靜かに朝風夕風に戰いて居た。

丘から丘へ越えて行く低い處には、綺麗に澄んだ水が流れてゐた。そこにはをり〳〵野を過ぎて行く雲の影や鳥の影などが映つた。赤い蹴出しを出して町の方へ行く田舍娘の姿も映つた。子供の通つて行く影も映つた。

富士山がいつもよく見えた。もう半以上雪で白くなつて居る。かれは自分の經て來た苦闘と艱難とをこの無心な『自然』と對照させて見るといふやうな心持を抱いて、よくその野原を散歩した。

大きな學校の塀に添つた路は、一方楢の林になつて居た。笹の葉がいつもガサガサと風に鳴つて居た。其處を少し行くと黄いペンキ塗の學校の門

があつて、中に、ひろい廣場が一面に見渡された。奥深く、建物が一棟二棟見えてゐる。

何うかすると、四角な制帽を冠つた若々しい血を赤い頬に漲らした學生が一人二人其處から出て來るのに邂逅することなどもあつた。何も知らない人達！　戀の喜悅も憂ひもこれから知らうといふ人達！　かれは過ぎ去つた自分の青年時代をかういふ人達に引くらべて、振返つて考へて見ない譯に行かなかつた。

橋の袂のレストウランに出かけて行く若い人達の生活もかれの想像に上ることが多かつた。

丘の陰になつたやうなところには、新たに建築した家などもあつた。大工が鉋や釿の音を四邊に響かせてゐるのもあつた。

新しい硝子戸、縁側に干したメリンスの派手な蒲團、八ッ手の白い花、風を防ぐために植ゑた樫の木立――さうしたものがかれの眼の前に映つて見えた。

ある夕暮に、かれは丘と丘との間に横つた低い谷を歩いて居た。疎な林の下には、穂の老けた薄や、枯れてガサガサする蕨などが一面に路を蔽つてゐた。もうあたりは薄暗くなりかけてゐた。

夕焼が靜かに野を照した。

ふと、向うから、大きな丸髷に結つた若い細君が、片手に臺ランプ、片手に風呂敷包を持つて、萱や笹の中を分けて此方に歩いて來た。

會釋しながらかれとすれ違つて行つた。

薄暮の空氣の中に浮出すやうな色白の丸髷姿は、ロマンチックな思をか

れの胸に起させずには置かなかつた。それに、片手に持つた臺ランプ！

この靜かな秋の光の滿ちた郊外に今日何處からか移轉して來た幸福な人達であるといふことは、その手に持つた臺ランプですぐ分つた。かれの胸には、俄かに海岸で人目離れて樂しく暮した半年の生活が新しい力を持つて蘇つて來た。人目離れた二人の世界！　何を爲やうが、何んなことを話さうが、誰も見てゐるものも聞いてゐるものもなかつた。二人はよく枯草の中に身を埋めて、前に展げられた蒼い海を見た……。

から思ふと、かれは急に其の幸福な男が見たくなつた。新しい細君と秋の光の滿ちた野にかくれて日を送る男！　羨しい妬しい男！　かれは十間ほど間を置いて、その細君の後をつけて歩き出した。

丸髷姿は薄暮の空氣の中に微かに見えて動いて行つた。

それは餘り遠い處ではなかつた。此間の散歩にもかれが眼をつけた三間位の家屋――路に臨んだ、前に高窓のある、小さなひらきの門のついた世離れた家屋の中に、その若い細君は入つて行つた。

『かなりあるわね』

から言ふ女の聲が聞えて居た。

庭にある脊の高いコスモスの花の色はもう分らなかつた。それほどあたりは暗くなつてゐた。

『早く灯をつけなけりやいかんね』かういふ男の聲が續いて聞えた。男は何でも縁側に近い一間に居るらしかつた。太い錆びた聲だつた。やがてランプの灯が點いた。

その小さい灯はかれが丘を越えて了ふまで野に見えて居た。

カーキー色の軍服を着けた兵卒の列は、巣から急に飛上つた鳥のやうに、銃劍を先に揃えて突進した。かと思ふと、まだ三間も行かない中にバタバタと折敷をして、構筒をして發砲した。

銃の音が一しきり靜かな空に響いて聞えた。

かれは林の角や、丘の下などで、よくさういふ光景に邂逅した。長い間、ぢつとして一處に折敷をしてかゞんで居ることもあれば、躍進に躍進を重ねて、見て居る中に遠くなつて了ふやうなこともあつた。時にはまた昨年あたり士官學校から出たやうな若い青年士官が、小隊を集めて、さも實際の敵が前に居るかのやうに眞面目に命令を下して居るやうなこともあつた。

田舍道の林の角で、晴れやかな秋の日影に浴しながら、其兵卒達は飯盒の午飯を食つてゐた。

さうした兵卒の野外演習は、かれに取つては、不思議なめづらしい奇妙なものであつた。かれは長い間立つて見てゐることが多かつた。

戀の爲に苦悶に苦悶を重ねて、時には死といふ境まで落ちて行つたことのある其身の心の閲歷に比べて、かれはかうした暢氣な世界のあるといふことを考へずには居られなかつた。自分の心に比べて何たる無邪氣、何たる無意味、何たる平和、そしてまた何たる平凡？

いくら考へても、悶えても、何うすることも出來ないやうな苦痛の連續と、子供の遊戯のやうな眞似をして、人を殺す戰爭の準備をしてゐる演習と、いかにその距離の大きいかといふことを考へながら、かれはぢつと立

盡して見てゐた。

ある日の午後には、黄い肩章をつけた砲兵が大きな砲車を幾箇となく馬で引いて來て、廣々とした平らな丘陵の上に並べた。『第三砲車拍て――』といふ命令と共に士官は手を揚げた。凄じい響は白い烟と共に野に森き渡つた。

『さうですか、もう外國に御出でになつたんですか』

かれはかう言ふより他に仕方がなかつた。

一人の水彩畫家があつた。背の生えた、體格のガッシリした、丈の高い人だつた。それをかれは野の散歩のところどころで見た。

林の夕日を後にしたところ、薄の穂の白く出て居る小川の岸、古い荒廢

した百姓家の前、たらだらと下りやうとする坂の上――其處此處にかれは其の人を見た。三脚を据ゑて、筆を手にして、熱心にわき目も觸らずに描いて居た。通りすがりの百姓が後に立たうが、近所の子供が其周圍に集つて來やうが、其畫家はそんなことには頓着しやうともしなかつた。かれも時々は立留つて見た一人であつた。かれは繪畫を見る眼識をさう深くは持つてゐないが、それでもこの畫家の尋常一樣の畫家でないといふことはやがて知れた。

一つの畫を完成させる爲めに、其畫家は三日も四日も同じ處に來て居た。

『此處等にそれでも繪になるやうな處があるんですか』

ある日、かれはかう言ひ懸けた。

『何處を描いても、皆な繪になります。東京では、此の郊外が一番好いで

すな』

『それは、さうでせう。武藏野の昔の面影は、一番此方面に殘つてゐますからな』

二人はぢき懇意になつた。

畫家はモネやマネやシスレーの話などをした。

『本當に寫生から入つて行つたやうな畫家は日本にはまだ無いんですからな、机の上で風景畫を書いてゐるんですからな』

だから碌なものは出來ないといふやうな調子で其畫家は話した。

かれはやがて其畫家を自分の幽棲につれて來るまでに懇意になつた。畫家はつい昨年歸つて來た西洋の話などをしてきかせた。

巴里の畫堂、其處には何んなに澤山な名畫が集められてゐるだらう。古いのもあれば新しいのもある。クラシシズム、インプレッレショニズム、サンボリズム、あらゆる繪畫の新しい研究は其處で芽を出して花を咲かせて實を結ばせる。巴里に行つて居れば、それはどんな研究でも出來る。『實際、マネの繪など見てゐると、堪らなくなりますからな、何うしてあんな繪がかけるかと思はれる位ですからな。……え、寫生です。全く寫生から發足して來た畫です。描いてある舞臺は其處等にいくらでもある平凡な景色なんですからな』

こんな風な調子で話した。

熱心に藝術の爲めに盡すといふ其畫家の性質と態度とは、かれに尠なからざるある影響と感化とを齎らして來るに十分であつた。結婚したばかりの細君を二年も三年も家に置いて、其畫家は艱難の多い旅をして來た。其

物語も心に響いて聞えた。

『自分のやうに戀に全力を浪費して、書を一冊碌に讀まずに二年の月日を經過し去つたものもある！』かれはかう思ひながら野の道を歩いた。

『僕には戀が事業だ。戀がなくつては、僕は一日も生きてゐられない』

ある日、机に向つてゐたかれはかう日記に書きつけた。

その水彩畫家は、畫をかきに來た次手に、外國から歸つて來てから、此の郊外の野原で描いた水彩畫を七八枚持て來て見せた。

床の間、机の上、書棚の上などにやがて並べられた鮮かな色彩は、かれの眼や心を新たにせずには置かなかつた。橘の上、落葉道、古池、――皆

なかれが知つてゐる景色である。かれは深く眺め入つた。

『何うでせう、貴郎方が御覽になつては？』

水彩畫家は得意さうにかれの顏を見て言つた。

『面白いですな。僕等のやうな素人には分りませんけれど、色彩がいかにもフレッシだ』かう言つてまた見入つて、『僕が毎日テクテクつまらなさうな顏をして歩いてゐる間に、君はかうした藝術品を作つたんですからな』

『イヤ、つまらんですよ』

其日は朝の中に霧がかかつて、それが日影に映つて、金色に輝き渡つて見えた。郊外はもう寒かつた。落葉の時節はいつの間にか過ぎた。

硝子障子の外には、山茶花の紅と白とが薄い日影を帶びて見えてゐた。畫家は靜かな落附いた言葉で話した。藝術より外に考へることが無いやう

な口の利き方をした。

『平凡な言ですけれど、矢張自然を師匠にするより他に仕方がありませんな』

こんなことをも言つた。

畫家とかれとは、時の間に十年も交際した友達のやうな間柄になつた。打解けてかくすところのないかれの態度が、尠からず畫家を動かした。かれは自己の戀と自己の苦悶とをやがて畫家に話した。

かれに取つても、舊い昔の友達よりも新しい友達の方がなつかしかつた。かれの前生、かれの戀、苦悶、かれの性格を知つてる友達が餘りにかれの周圍に多かつた。其の友達はいつも『また加藤の苦悶談が始まつた』といふやうな顔をして聞いた。

かれは自己の經て來たロマンチックな境遇を、一度新しい心で聞いて呉れるやうな友達を得たいと思つてゐた。それをかれはこの畫家に見出した。

畫家とかれと伴れ立つて歩く姿は、やがて其處にも此處にも見えた。畫家が三脚を据ゑて寫生をしてゐる傍で、かれは卷煙草をふかしてぢつとそれに見入つて居た。二人は遠い八幡の社あたりまでも行つた。

畫家は荷車や肥料車や馬車の通る塵埃の白い街道を越して、汽車の響の絶えず聞えるといふやうな處に住んで居た。二階の一間には、白いカアテンが硝子窓の日影を彩つて、鼠色の壁の處々には近作の水彩畫が二つ三つかゝつて居た。

外國で買つて來たエッチングや、銅版や、寫眞帖や、繪葉書帖や――さうしたものの並んだ座敷に、カアーテンを透してをりをり夕日が射して來

た。

『イタリアでは、かういふものを賣つてゐるんです。一つ上げませうか』

白膏細工のダンテの肖像を畫家はかれの前に置いた。

畫家の細君は痩せた靜かな人だッた。戀愛の時代を人知れず通過して了つたといふやうな感じを與へる人だッた。默つて丁寧に、茶や菓子を其處に運んで來て、そしてすぐ階下に下りて行つた。

樺を描きかけた大きな水彩畫が其處にあつた。畫家は振返つて、『樺を一つ描いて見やうと思つて始めたんですが、何うも旨く行きません』などと言つた。

汽車は時々大きな地響をさせてその傍を通つて行つた。

獨りで居る時には、まだ女のことを思つて居ることが多かつた。

それは今ではもう女が突然詫びに歸つて來るだらうなどとは思はなかつた。そんな夢のやうな空想からは次第に離れて來た。野に向つての散歩の一歩毎に、時計の分秒の一刻毎に、さうした空想から段々遠かつて行くやうにも思はれた。時にはそれが堪らなくさびしい悲しい情緒を誘つて來た。覺めて行く、覺めて行く。かう思つて緣側に立盡してゐることなどもあつた。

渠は自分の遣つて來たことを遙かに思つて見るやうな人になつて居た。中に入つていろいろなことをした第三者の心持もそれと解釋が出來るやうになつてゐた。常識を外れた自己の行爲をも批判した。

遠い處に居る女の心が鮮かに自分の心を掠めて通るやうな氣分のする日

が幾日か續いた。

『不幸な女だ！』

かう獨りで自分に言つて見て、女の一生を頭に描いて見たりした。

『何んなに率直に、何んなに熱烈に、何んなに眞面目にかれは其女を戀したらう？　かれは心底から女の爲めを思つて居た。物質では貧しい生活であつたが、自分ほど精神的にかの女を愛して居たものは恐らくは無かつた。將來もなからう？　しかし、それが女には解らないのだ。』

こんなことを日記に書いたやうな日もあつた。

『……猜疑、嫉妬、不安、不信、さういふ暗黑の中を自分は通つて來た。自分のやうな正直な心が、その暗い影の爲めに傷けられた狀態は痛ましい光景である。自分は幾度か自分の赤い血の流るゝやうな苦痛を覺えた……』

そんなことも書いた。

『事業？　事業？　自分も事業をしなければならない。何の事業？　藝術？　政治？　農業？』

かう書いた翌日の條には、

『しかし、事業に向ふには、自分はまだ疲勞してゐる。それに自分は餘りに事業に戀してゐない』

畫家の性格に關しては、

『事業より外に他を顧みない羨しい勢力家である。其人に取つては、事業が卽ち唯一の戀である。……戀を事業とする人間と事業を戀にする人間と……』

かう書いて置いた。

七

娘の顔を描いた小さな水彩畫がいつかかれの机の傍の柱に懸けられた。

大工の上さんは、かれの留守に、二三度その傍に寄つて見た。水彩畫の繪具は上さんの眼を惹くに十分な鮮やかさを持つて居た。

髪を桃割に結つて居た。見たやうな顔だと思つた。

一日、勝手から座敷に上つて來た上さんは、

『あれは、誰？』

『知つてる筈だがな』

かれは得意さうにして笑つた。

『知つてるッて……私が？』

『さうさ』

上さんは傍に寄つて、もう一度見て、『何うも見たやうだとは思つてるんだけども』

『見たやうな處ぢやない。始終見てるぢやないか。』

『さう？』

考へて、『分りませんね。誰？』

『まア、當てて御覽』

もう一度見て、

『分らないねえ！』

『それ』とかれは顎で向をしやくるやうして、『あすこの橋のそばの西洋料理の娘さ！』

『あゝあゝ、さうね。まさかあの娘だとは思はないもんだから、分らなかつた』上さんはかう言つて笑つて、『さう言はれて見れば、よく似てるよ……あの畫かきさんが畫いたの』

かれは點頭いて見せた。

上さんは、それでたん納して、勝手の方に行きかけたが、『貴郎も物好だよ。あの小娘なんか仕方がないぢやないか』

『またあゝ取るからな……まア好いよ』かう言つて笑ひながら、かれは道りかけた仕事の筆を取つた。

其畫を描いた時のさまをかれは思ひ出して居た。それはある景色を寫生して來た歸途であつた。かれも畫家も餓ゑて居た。かれは畫家をそのレストウランにつれて行つた。空氣の影の濃い、何となく心の落附いた靜かな

日であつた。誰も客の居ない二階には、薄い夕日が硝子を透してさし込んで、赤い實のついた青木が卓の上の花瓶にさゝれてあつた。かれはフォークを取りながら紅葉を流した時の話をした。

『それは面白いね――』畫家はかう言つて聞いた。

『鳥渡、感じの好い娘だね』

畫家は丈の小づくりな色の白い娘の後姿を見て言つた。

『おい、鳥渡其處に立つてお出！』

再び二階に上つて來た娘にかう言いて置いて、畫家は傍からスケッチ帖を出した。娘は顏を赤くして居た……。

八

谷について曲つて流れて行く水の音は屋を撼かすやうに聞えた、家々の軒には小さい氷柱が下つて、巖壁を傳つて落ちる瀧のしぶきは、白く岩にこほりついて居た。

溫泉宿は谷の底のやうな處に二三軒並んで居た。二階から二階に通ずる廊下には、綿衣に縮緬の帶をぐるぐる卷いた肥つた浴客が立つてゐるのが見えた。浴場からは湯氣が白く颺つた。

山には雪が白く積つて居た。

寒い寒い山の溫泉場には、客といふほどの客もなかつた。室には火燵が開かれ、火鉢には火が活々と起きて居た。『寒い、寒い』などと言ひながら客は日に幾度となく湯に出懸けて行つた。

谷川に臨んだ二階の一間には四五日前から二人が來て居た。昨年の暮、

『僕は山に雪を描きに行つて見やうと思ふんですが、何うです、行つて見ませんか』かうかれはその畫家から誘はれた。其處には畫家の遠い親類に當る旅籠屋があつた。『何アに、金などかゝりやしません。一日一圓かゝりやしません。それに今は靜かですからな。山の溫泉場の冬もまた詩趣があつて好いもんですよ』かう言つて畫家は勸めた。

畫家は、冬になると、何時も其處に出かけて行く話などをした。スケッチなども出して見せた。

霜解の深い郊外の路は、もう以前のやうにかれの散歩を許さなかつた。それに大工の上さんを相手にしてのさびしい生活も、かれに取つては、既に堪へ難いものになつてゐた。傷ついた心を山の溫泉に……。かれはかう思つて、畫家の跡に跟いて遣つて來た。

初めて着いた夜の感じが先づ第一にかれ心を動かした。谷に下りる暗い冷たい危ない路から、俄かに明るい静かな帳場に入つた時、其處にゐた品の好いお婆さんは、『まア繁さんかね、よく來たね』と言つて迎へた。それは畫家の細君の叔母さんで、他に細君の從兄妹に當る男や女が二三人居た。賑やかな暖かさうな家庭であつた。

『好い親類を持つてるね、君は』

かれは幾度となく畫家に言つた。

枕を撼して來る谷川の音、それを明るいランプの下で、湯に暖つた體を半分夜着の中から出しながら、長い間かれはぢつと耳を欹てゝ聞いて居た。

『痛恨に堪へんなア！』暫してから言つたかれの眼には、涙が光つた。かれは女のことを思ひ出してゐた。

翌朝、かれは遲くまで寐てゐた。畫家は早く起きて谷川の縁を歩いたり、帳場に行つてお婆さんと話をしたりした。十時近く歸つて來て見ても、かれはまだ夜着を冠つて寐て居た。

漸く起きて、顔を洗つたかれは、

『だツて、僕は昨夜殆ど寐なかつたんだもの、いろんなことが思ひ出されて思ひ出されて、何うしても眠られない。女のことばかりぢやないんだ。人生のことがしみじみ思ひやられて、萬感交々胸に起るといふ風で、三時まで起きてゐた。……君は、そんなことはお存じなしだらう。それや、君は、心持好ささうに寐てゐたからな。グウグウ鼾をかいて寐てゐた。君などは、夜、夢を見ることはないだらう？』

『まア、無い方だね』

『僕はつくづく羨しくなつちやつた。君のやうに、一日働く時はウンと働いて、床に入るとすぐイビキをかくやうな人は本當に羨ましいね。僕は、君の健全な呼吸づかひを聞いて、昨夜といふ昨夜は、羨しいのを通り起して憎くなつちやつた！』

畫家は莞爾して居た。

『つまり苦勞がないんだね、』

『さういへばさうだらうね』

『僕は昨夜つくづく思つた。僕はこんなに深く人生のことや男女のことや友人のことやいろんなことを思つてゐるのに、……さうとは知らず靜かに穩かに眠てゐる友達があるんだからなア！　自分の心持は何うしても他人に傳へることが出來ない！　かう思つたね』

『だッて、それは仕方がない』

『それは仕方がないのさ。それから水の音、ドウと流れてゐる水の音、盡すに流れて落ちて行く水の音、それと僕の思つてゐることとの交渉を考へて見たね』

かれは茶を飲みながら、こんなことを言つた。眉を昂げて深く人生のことを考へるやうな眼色をした。

二階の欄干に添つて、船底になつてゐる安樂椅子が一箇置いてあつた。かれは湯に暖つた身をそれに凭せて、輕く體を動かしながら、樹立の間に奔跳して流れて行く泡立つた白い谷川を見たり、朝日のキラキラと反射する山の雪に眺め入つたりしてゐた。谷川の向ふには、獵師らしい男が獵銃を搖いで山の裾を縫ふやうにして歩いて行つた。

畫家は川を越えたところに三脚を運んで行つて、其處で川原の石の雪を描かうとした。かれは暫し立つて見て居たが、やがて靜かに踵を溫泉の方へ旋して來た。

湯氣の白く處々に颺つた谷底の冬の溫泉場は、繪のやうにその前に展開されてゐた。ある二階の欄干には、手拭が二筋かけてあつて、それが白く際立つて此方から見えた。赤い襷をかけた娘は忙しさうに此方の廊下から彼方の廊下へと歩いて行つた。

地上に雪はあつたが、それでも空は瑠璃色に鮮かに日に輝いてゐた。凍つた寬の口からは、水がチョロチョロと靜かに落ちてゐた。

盥を日に當る處に持出して、せつせと娘の洗濯してゐる傍では、手拭で額髮を卷いた子守が、脊中の子をあやしながら唄を小聲で唄つてゐた。

塀のところに立て懸けた張板の紅絹は、目も覺めるやうに地上の雪と日影とに反映してゐた。

かれが机に坐つて居ると、障子を靜かにあけて、婢が茶だの菓子だのを運んで來た。

『お淋しいでせう』

かう其婢は言つて、いつまでも其處に坐つて居た。

それにこの溫泉宿には、娘が二人居た。一人は二十五六で、一人は二十位であつた。畫家の細君は其の大きい方の娘の妹であつた。『義姉は一度嫁に行つたんですけれど、緣がなくつて歸つて來たんです』畫家は曾てかうかれに話して聞かせたことがあつた。何方かと言へば痩せた方で、何處

を探しても、もう若々しい處はなかつた。身裝などは構はうともしなかつた。

若い方は肉附の好い頬の赤い可愛い顏をして居た。此間まで東京の女學校に行つて居たので、髪の結方から口の利き方まで田舍娘らしい處は少しもなかつた。繪が好きで、『兄さん兄さん！』と無邪氣な態度で、畫家の後を追ひ廻した。端書を持つて來ては、よく繪を畫いて貰つたりなどした。

『お冬さん、遊びにお出なさい。兄さんが居なくつても好いでせう』

二三日經つ中には、廊下ですれ違つてもこんなことを言ふほど氣が置けない間柄になつてゐた。

かれは机に向つて、手紙だの日記だのを書いた。その多い手紙の中には別れた女の友達に遣る返事などもあつた。其女は矢張かれの結婚に失望し

て、親の取きめた夫を持つて田舍に歸つたといふやうな人であつた。女は、田舍の單調なことや、雪の山國の圍爐裏の邊の無趣味なことや、都會の生活の戀しいことや、山の中に埋れる若い心の悲しいことなどを細々と書いてよこした。矢張、運命の悲しさを嘆いて居るやうな女であつた。かれは長い長い返事を書いた。

別れた女の從妹に當る人の手紙には、女の消息がいくらか洩してあつた。いづれ近い中、東京に出るやうな話だなどと書いてあつた。かれはそれを見て心を動かさずには居られなかつた。

矢張、二つの心は空間に波打つゝあるのをかれは染々感じた。東京へ！かの女が東京へ！二つの離れた心が東京へ！

もし何處かで邂逅したら！　かれは其時のことを想像した。不思議にも

かれの心は最早以前のやうな熱烈なものではないといふことに氣が附いた。無論、今では再び一緒になるといふ氣が起らなかつた。さういふ氣はすつかりなくなつてゐた。寧ろ知らない關係のない全くの他人といふやうな顔がしたいと思つた。

『かういふ風にならなければならぬやうな目に逢せたるかの女が惜く候。またかういふ心の姿にならねばならぬわが身が悲しく候。今は唯、心の落附きて、何處にてかの女に逢ひ候とも、他人に逢ひたるごとき心の持方をするやうにならんことを祈り居り候――』別れた女の從妹にやる手紙にはかう書いてかれは筆を結んだ。

それにも拘らず、その消息は、渺なからずかれの胸に新らしい印象を與へたやうに見えた。安樂椅子に凭りかゝりながらも、長い間、そのことを

考へて居た。散歩に出かけた途中でもそれを思つて居た。

川原に行つて見ると、畫家は傍目も觸らず一生懸命に繪筆を動してゐた。かれは其後に立つて見てゐた。その瞬間にも、女の消息が、矢張りかれの頭を往つたり來たりしてゐた。

『何うでも好いぢやないか、そんなこと！』

かれはかう幾度となく簇つて來る女の記憶を打消した。

氣が附くと、かれは岩壁に添つた暗い道を高臺の方へ出やうとして居た。

高臺の溫泉場は一層晴れやかに日に照されてゐた。西洋造の旅館が彼方此方に立つて、賑かな通りには、郵便局だの、外國人相手の美術商だのが軒を並べて居た。土地の繪端書を賣る店などもあつた。

夜は電燈が四邊を明るくした。

かれは此處に來ても、矢張一間に落附いて仕事をしては居られなかつた。一二枚翻譯をしては、すぐ倦きて、例の通りステッキを抱へて出懸けた。

畫家はをり〳〵かれの思ひもかけないことを知つてゐるのに驚かされた。彼處の兀頭のお爺さんは？彼處の意氣な上さんは？彼處の廂髪に結つた娘は？年々遣つて來ても知らないことをもかれは逸早くも知つて居た。

『君はさういふことを探訪する天才ですな』

かう言つて畫家は無邪氣に笑つた。

繪葉書を賣る店の前にかれはよく立つて居た。山に圍れた湖、湯氣の白くあがつた谷間の溫泉場、岩壁を傳つて落ちる細い瀧――その奥には銀杏返し結つた頬の紅い意氣な二十三の娘が坐つてゐた。

ある夜、電燈の明るい其店先にかれの姿はくつきりと浮出すやうに見えて居た。娘はこの山の中の溫泉場にはめづらしいやうな派手な裝をして、繪葉書を入れた箱を幾箇となく客の前に並べて見せて居た。

かれは其處に腰を懸けて煙草を吸ひ始めた。

長い間娘と話して居た。

『あれが名高い石風呂ですか』

白いリボンをかけた東京から來た庇髪の女は、橋の上に立つてゐるかれに向つて訊ねた。

『え、さうです』

かれは笑つて見せた。

女は暫く其處を去らうとしなかつた。かれと同じやうに橋の欄干に凭りかゝつて、深く流るゝ谷川の早瀬を見た。

『深いですね、眼がまはるやうですね』

『え、隨分深い――』

かれはかう調子を合せた。續いて、

『東京からお出ですか』

『え』

『寒いのによくお出でしたね？』

『でも、東京で考へたよりは寒くはありませんわね』

かう言つて、『貴郎は、何方？』

『このすぐ下の溫泉場に居ます』

二人はこんな話をして、其處に立つてゐた。女は、直き其處の溫泉宿に居ることを話して、『母が居るばかりですから、ちとお遊びに御出なさいまし』などと言つて別れて行つた。

谷に添つて少し行つた處に、竹藪だの梅林だのが續いて、其奥に山門の高く聳えた寺があつた。かれの姿はをりをりその境内に見えた。

本堂に續いて、小さな庫裡が見えて居た。春は近所から人が見に來るといふ大きな絲櫻が庭一杯に枝を張つて居た。雪が畠の青い菜の上に積つて居た。

かれは絲櫻の幹の周圍を一廻して、庫裡の方を一目見て、それから本堂の傍を通つて墓域の方に行つた。

ある夜、畫家とかれとは火燵に當つて何か話して居た。其處にこの家の總領の娘が茶菓子を持て來た。

『繁さん、お茶を淹れて上げませうか』

『え、何うぞ御願ひします』

皆な機嫌よく面白さうに話した。總領の娘も長い間其處に坐つてゐた。畫家は思ひついたやうに、

『義姉さん、お寺に好い娘がゐますね』

『今、知つたの？』

『だつて、そんなこと平生、注意してゐやしないから、大抵知らずに居るけれども、昨日退屈して、寺に行つて見ると、庫裡から娘が出て來た。鳥渡、色の白い、田舍には珍らしい子ですねえ』

『お從さんッて言ふのよ。あれでも二十四よ』

『二十位にしか見えないがね』

『あれで、あのお寺の和尚、道樂坊主だから、遊藝などをあの娘に仕込んで、この土地でも評判者なのよ。お寺で三味線の音がするんだから、隨分開けたお寺よ』

『道理で、珍らしい意氣な娘だと思つた。』

默つて頸を撫でて聞いて居たかれは笑ひながら、

『僕も、もう餘程前からあの娘を知つてゐる』

『え！君が――』

『僕の顏を見ると、向うから會釋する位になつてるんだよ』

『まさか、うそでせう』

かう總領の娘も笑つた。

『君は本當に早いね。さういふことにかけては天才があるねえ』

『いや、別にさういふ譯でもないがね。もう五六度は見てるよ。面白い處に寺があるなアと思つて入つて見ると、三味線の音がするから不思議に思つて立つて聞いて居た。それから本性を見てやらうと思つて、ちよいちよい出懸けたんだがね』

『好い娘だらう』

『うむ、田舍ではまづめづらしい方だね』

總領娘は、默つて意味ありげにかれの顏を見て居た。

初めて見たのは、門から庫裡に入らうとする後姿、次に見たのは、障子を明けて廊下を歩いて行く姿、鳥渡此方を見た白い顏——そんなことをか

れは面白さうに話して聞かせた。

『これが、段々出來て行くやうだと、それこそ小說だがね。實際の世の中には、さういふことは餘りないね。』

かれはこんなことを言つて笑つた。

大きな西洋造の旅館の裏通の細い路——長い塀に沿つて、午後の日影が薄い光をぼんやりと四邊に落して居た。

旅籠屋の女中らしい銀杏返しに結つた年增の女は、長い間其處に立つて誰かを待つて居た。

急に向う側の長い塀の木戸が開くと、白の服を着た濃い頭の髮にテラテラと油を塗つたコックらしい男の頭が、其處から四邊を見廻はした。女は

急いで其方へと走つて行つた。

二つの姿は寄添ふやうにして暫く何事をか熱心に話して居た。

かれは其傍を通つて行つた。

九

一月ほど後には、かれはもう山の溫泉から歸つて來て居た。

僅かな月日の中にかれはいろいろな變遷を見た。大工の上さん——毎朝飯を炊いて呉れた元氣なその上さんは、かれが山の溫泉に出かけた十日目に發病して、一週間ほど病んで、間もなく彼の世の人になつて了つた。郊外にかれの歸つた時が丁度初七日で、その小さい家の中には、大工の磯さんがぽつねんと一人さびしさうにして坐つてゐた。佛壇には花やら燈明やらが供へられてあつた。

それに、橋の畔のレストウランの娘ももうゐなかつた。娘はある夜豫ねて約束して置いた學生と一緒に家出をして了つた。その學生とはかなり薄い關係で、前からその計畫をしてゐたらしく、いろいろ調べて見ても、その行衛は更に分らなかつた。かれはさびしい心に閉されて、其處から郊外の家へと歸つて來た。

かれは柱にかけた娘のスケッチを前にして、薄暗いランプの光の中に坐つて居た。

かれの眼の前には種々な新しい幻影が通つて行つた。山の溫泉場での一月、其處で行はれたさまざまの光景が思ひ出された。旅店の二人の娘——總領の娘は、不意にかれが歸ると言ひ出したのに驚いて、袂を捉らぬばか

りにして引留めた。若い方の娘は、瀧の落ちる暗い路のところにかれを連れ出して、

『何うか、忘れずに居て下さい、ね、ね』と言つて泣いた。

かれは畫家の眞面目な難かしい顔を頭に浮べた。

『事業が戀人なんだからね、君などは。何うせ僕等の心は解りやしないよ。僕は空想では生きてゐられないんだから。藝術とか事業とかいふやうな假面を被つたやうなものでは生きてゐられないんだからね。僕は生きてゐるものでなければ興味を惹かないんだから――』かう言つて、かれは畫家に別れて來た。

『君のやうに熱心に繪を畫いてゐる人を見ると、尊敬はするが、僕がさうならうとは決して思はない。僕に言はせると、君はさうして毎日繪を畫い

てゐるが、それが何だと思ふね。もつと生々した事業は他にいくらもある。女にラブして、女の心に生々とした自己の像を刻んでやる方が何れほど立派な生效のある仕事だかわかりやしないと思ふね』

こんなことも言つて來た。

かれは毎日毎日寒い風にも頓着せずに熱心に山陰に行つて寫生をしてゐる畫家の姿を頭に浮べて見た。そして自分と引較べて考へて見た。何たる相違だらう。何たる性格の相違だらう？かれはかう思つて今まで通つて來た自分の半生を靜かに考へた。

兎に角、郊外の家はかれには最早餘りにさびしくなつてゐた。それに上さんに代つて世話をして呉れるやうな人も居なかつた。

野や、林や、丘や、さうしたものももうかれに滿足を與へなかつた。

大工の磯さんも、一人では不自由で仕方がないから、二七日でもすんだら、親分の家に同居する積だなどと言つてゐた。二七日の日には、それでも其小さい家に、草色の金襴の僧衣を着た近所の寺の和尚さんが遣つて來て、静かな讀經の聲が長い間聞えて居た。

其夜、磯さんはめづらしくかれの家に遣つて來た。

『可哀相なことを仕ましたよ。矢張、縁がねえんですな』磯さんは、酒に酔つて赤い顔をしてゐた。

聞きもせぬのに、磯さんは上さんとの長い間の關係を話した。『五年ですからな、隨分深い馴染でしたよ』磯さんはこんなことを言つて聞かせた。

『一つ、義太夫の三味線の旨い奴をさがすさ！』

笑ひながら、かれが言ふと、磯さんは染々と、

『まア當分は嚊なしで稼ぎまさア。男がさう薄情では、佛だッて浮かばれませんや』

曇つた寒い日に磯さんは移轉して行つた。路に添つた入り口の門の前に荷車が一臺長い間置いてあつて、磯さんと、手傳に來た若い男とが、長火鉢だの箪笥だの下駄箱だのを一つ一つ擔いだり持つたりして運んで行つた。

さびしい心を抱きながら、硝子障子を隔てて、かれはそれを見てゐた。

道具を山のやうに積んだ荷車には、やがて細引が十文字にかけられた。磯さんは荷車と家屋との間を行つたり來たりした。家の雨戸を彼方此方と閉めてゐるのも見えた。最後に、磯さんは暇乞に來た。縁側から中を覗く

やうにして、

『ぢや、旦那、また御目にかゝります。御機嫌よう！』

かれは障子をあけて、

『いよ〳〵行くのかえ。僕もこゝにはもう長くは居ないよ』

『どつか好い處がありましたか』

『今日返事が來る筈だ』

『世話をするものがなくつちや、こんな處に居られやしませんや』かう言つて『ぢや、また御目にかゝります』

磯さんは別れて行つた。

かれは障子を明けたまゝ、ぢつとそれを見て居た。二人は荷車の處に立つて暫らく空などを見て居たが、手傳に來た方の若い男がやがて梶棒を上

げて車をひき出した。荷車の音がガタガタと暫し田舍道に聞えてゐた。

其音もいつか聞えなくなつた時、かれは言ふに言はれないさびしさを感じた。野も、林も、田舍道も古池も、長い間心の傷痍の隱遁所であつた幽棲も、今はかれに何等の色彩をも與へなくなつた。かれは新に前に展げられて來る境遇を想像してゐた。

十

かれは取敢へず友達の居る山手の下宿屋に行つた。

その下宿屋は隣の後家さんが持つて居た。後家さんの住んで居る家も同じ二階屋で壁と壁とが隙間もなく相接してゐた。造作も似てゐた。後家さんの住居の格子戸の前には、八ッ手が手を擴げたやうに一面に繁がつてゐ

た。

その昔の友達は、書生達を國から大勢連れて來て居た。かれの行つた時にも二三人其處にごろごろしてゐた。『こんなに狹いんなら、他に行く處が無いでもなかつたんだ』かれは友達に言つた。

『何アに、ぢき好い間が明くよ。國に歸る奴がゐるんだから。二三日此處で辛抱して居るさ』何も彼も知つてゐる快活な友達はかう言つて笑つて、『境遇を變へやうと思つた時は、ぐんぐん變へて了つた方が好いよ。思ひ立つた時に斷行しないと、得て障碍が起つて來るものだよ。だから、僕は兎に角やつて來たまへ。何うにでもなると言つてやつたんだ。あんな野原の眞中にいつまでもくよ〳〵思つてゐたつて仕方がないからな』

『でもこれぢや窮屈だ』

『何アに、僕は朝出て行くだらう。書生達もそれ〴〵用事を持つてゐる樣で、君のやうに遊んで居る人間はないから、晝間は靜かなもんだ』

こんなことを言つて友達は笑つた。

その友達は都下で名高い若手の新聞記者の一人であつた。書棚には、西洋の政治論だの、詩集だの、歷史物などが並んで、四邊には雜誌や新聞が一面に散ばつてゐた。毎朝、十時が打つと、長押にかけたワイシャツを冠るやうにして着て、スコッチの脊廣に縞ラシャの外套を被つて、流行の意氣な中折帽を冠つて、快活に格子戸を明けて出て行つた。

その友達は毎日歸つて來ては、『何うも此頃の議會は行つて見てゝも張合がある。今日の豫算案などは實に面白かつたぜ』などと話した。賑やかな町の話、忙しい人達の物語、種々雜多な市井の出來事、さうしたことを友

達から聞く度に、かれの心は動かずには居られなかつた。かれは徒に過去つた自己の月日を考へた。

夜は一間は賑かであつた。書生達は腕押をしたり、トランプを引いたりした。ハアモニカを鳴すものもあつた。夜、遅くなつてから、阿彌陀をして、汁粉だの、鮨だの、菓子だのを買つて食つた。

『若い人達は元氣が好いナ』

かれはかう言つて其人達の騒ぐのを笑つて見てゐた。

書生の一人が欄干の處に立つて、隣の方を見て手招をしてゐた。それはある夕暮であつた。庭の梅が白く四邊に捺すやうに浮出してゐた。

『ヤアい』

かう言つて、その書生はわざと顔をしかめて見せた。

室の中に坐つてゐた一人の書生も立つて其處に出て行つた。

『おい、構ふなよ』

中でも一番年嵩らしい書生は、室の中から聲を懸けた。

『何んです？』

好奇心に誘はれたやうにして、かれは欄干の處に出て行つた。

其處からは、同じつくりの隣の二階の欄干の處がよく見えて居た。其處には十二三になつたかと思はれる綺麗な一人の娘が、お下げの髪に白いリボンを見せて、此方を見て、赤んべいをしてゐた。

『馬鹿ヤアい』

此方でかう言ふと、其娘は長い紅い舌を出して見せた。

『杉山の馬鹿ヤアい！』

娘は書生の名を知つてゐた。杉山と呼ばれた書生は笑つて居た。

一人の書生は、隣の欄干に接した處に顔を出して、ハアモニカを吹いて見せた。

見てゐると、また奥からその妹らしい十歳位の女の兒が出て來た。七歳位のも出て來た。

『並んだ！並んだ！ヤアい』

此方からは、かう囃した。

『並んだ！並んだ！ヤアい』

其の大きい前の娘は、忿さげに口を曲げてその眞似をした。

『みいちやん、書生さんに調戯つちやいけませんよ』

かういふ聲が室の中でした。同時に二十二三の丸顔の色の白い庇髪に結つた姉娘の顔が、ちらりと障子の間から見えてまたすぐ引込んだ。

かれは其前にもその隣の二階を覗いて見たことがある。欄干の縁側には、古い本箱が置いてあつて、其下に娘の針箱の赤い針山が際立つて見えて居たことなどもあつた。一間は六疊らしく、其間からをりをり母親の錆びた太い聲と總領の娘の若々しい艶な聲とが聞えて來た。子供達の泣聲もした。

『母さん、みいちやんが言ふことを聞かないで仕方がありません』

かういふ聲もした。

『隣は後家さんと娘ばかりだね』

ある時、かれはかう友達に言つた。

友達はいろいろと其の隣のことを話して聞かせた。亡くなつた主人と謂

ふのは、一面政治家、一面文學者として、明治十七八年頃に非常に盛名のあつた人で、病氣に罹つて死んだ時には、都下の新聞紙は筆を揃へて皆な哀悼の意を表した。

『さうか、あの人の未亡人か』

かれも其名はかねて聞いて知つてゐた。

『でも、少しは遺産があつたものだから、此處に此二軒の家と向うの貸家とを造つて、それで未亡人は娘の敎育に半生をまかせることが出來たのだ』

友達はかう言つてその話を結んだ。

後家さんと娘達の女暮しでは、寂しいことがあつたり、不便なことがあつたりするらしかつた。で、書生達は歌留多をするからと言つては呼ばれ、御馳走が出來たからと言つては呼ばれて行つた。

一人の書生は、二番目の娘に、英語を敎へに毎晩出懸けて行つた。

ある日、その總領の娘は、欄干の處に出て立つて居た。

かれと顏を合せて、恥かしさうに輕く會釋をした。頰のあたりが赤くなつてゐた。かれは微妙な心の動搖を感じた。

『梅が大變よく咲きましたね』

かうした機會をつかむことに經驗のあるかれは、かう言つて笑つて見せた。

『もう遲い位ですわね』

娘は存外開けた口の利き方をした。

『何處か梅見に入つしやいましたか』

『いゝえ……』

『今日のやうな天氣の好い日に龜井戸あたりへ行つて見ると好う御座んすね』

『さうですね……蒲田にも此頃梅が澤山あるさうですねえ』

晴れた空には鳶が舞つて居た。隣の庭に咲いてゐる沈丁花の強い匂ひが四邊の空氣に充ちてゐた。

『丁子は高い香を持つてますこと』

娘はかう獨語のやうに言つて、隣の庭の方を見た。

二人は暫く立つて居た。

この朝、かれは山の溫泉宿の總領娘から一通の手紙を受取つた。――御

心のほどしみ〳〵と忘れ難く――と書いてある處を繰返して讀んで、かれは微笑した。

かれはつらい悲しい失戀の一年の年月の先に、段々わか草の春のやうな氣分の展けて來るのを不思議にした。

かれは冬のやうに寒く冷めたかつた年月を時々頭に繰返した。烏渡想像が出來ないほどかれの心は其頃別れた女に偏つてゐた。其女の髮、眼、肌でなければ生效がないやうに思詰めたことも一度や二度ではなかつた。かれは野中の一軒家にさびしく過した二月三月の生活を振返つて考へて見た。

男の一分が立たないやうな屈辱を感じて、中に立つた第三者の家に啞鳴込んで行つた時の權幕や、短刀を懷にして邂逅次第女を斬つて捨てやう

と思つて歩いた時分の心の焦燥や、人道の上から言つてもこの話はこのままに濟まされない、この不道理、不忠實、不貞操の爲めに犧牲になるのが自分の事業だなどと言つて友達を驚かして歩いた頃の熱烈なる情緒や、さうしたものは、今から考へて見ると、丸で別な人間が遣つたこととしか思はれなかつた。またその一面には、その熱心になつた自己の姿やら形やらが氣耻しく感じられても來た。

『何うでも好い！』

かういふ氣分の日が長く續いた。

別室が長く明かないでも、かれは他に移轉しやうともしなかつた。無邪氣な書生と、隣の娘達の嬉々とした笑聲との中でかれは暢氣に一日々々を送つた。

一月も經たない中に、かれはもう隣の人達と二三年も交際したやうな懇意な間柄になつてゐた。

よく出懸けて行つては、長火鉢の前に坐つて、娘や母親などを笑はせて居た。

快活な、話上手な、輕いウキットに富んだ男らしいかれの言葉は、世故に長けた未亡人の耳にも鮮かに面白く聞取られた。

『本當に、加藤さん、話が上手ねえ』母親と娘とはかう言つていつもかれの噂をした。

二階の新聞記者は、『矢張、さういふ天才があるんだねえ。先生のは、若い娘や未亡人の前になど出ると特に光彩を發揮して來るんだから堪ない：

……十日を經たない中に、もうちやんと長火鉢の向ふに坐つてゐるんだからね』かういふ風に、矢張かれを知つてる新聞記者の一人に話してゐた。

前の戀愛事件を、かれは平氣で、その長火鉢の前で話して聞かせた。靜かな落附いた調子のある言葉が、流るるやうに滑かに人々の耳に染み込んで行つた。何處までも眞面目といふことを失はないかれの言葉は、女達の心を捉へるに十分であつた。

總領の娘は、其時、裁縫の上に顏を落しながら聞いてゐた。紅絹の布が上氣した顏に反射して見えた。

『矢張、男には未練があるもんですから……』かう言つたかれの顏には、紅い血が上つてゐた。

『でもねえ、母さん、餘りねえ……』娘は小聲で言つて母親の方を見た。

十一

娘の顏が二階の欄干の處に見えた。

『加藤さん……居らしつて？』かういふ小さい聲が續いて聞えた。

かれは立つて行つた。午後一時頃であつた。

『何方も居ないの？』かう言つた娘は顏を赤くしてゐた。

『え、誰も？』

『私の宅でも、母が子供をつれて里に行つて、私が一人留守番をしてゐるんですからね、遊びに入らつしやらない？』

『行きませう』かう言つて、かれが座敷の中に入らうとすると、

『此處から入らつしやいよ。跨げばすぐ來られますわ』

『でも……』

『大丈夫ですよ。誰も見てやしません』

『見てたッて構はないけれど……跨げるかしら！』

『跨げますとも！』

隣の二階の欄干と此方の欄干の間には、一尺位の隙があるばかりで、成程、容易く跨げるらしく思はれた。暫くすると、米琉の羽織を着た綺麗な頭髪を分けたかれの小づくりな姿が、此方の欄干から向うの欄干へと渡つて行くのが四邊に浮出すやうに見えた。

『成程、譯はないね！』から言つて、かれは笑つた。

娘は默つて彼方此方を見廻した。誰も見てゐなかつたのを見て、安心したやうに莞爾した。

やがて伴れられて行つた一間は、座敷の八疊に續いた六疊で、長押にかかつた父親の肖像が斜に此方から見えてゐた。机だの、鏡だの、新しい箪笥だのが並べてあつた。

『待つて頂戴』

娘は聞耳を立てて二階の階梯の處まで出かけて行つた。

東京市芝区愛宕町二丁目十四番地
印刷者 金崎金平

（終）

明治四十五年七月十六日印刷（朝）
明治四十五年七月十九日發行
（實價金壹圓）

著作者 田山綠彌
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田靜子
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

印刷者 金崎金平
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社

發行所 春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話本局五一番）
（振替口座東京一六一七）

内務省認可
著作者
三島朝吉

現代文藝叢書

第九編

死の方へ

田山花袋氏著　（第三版發賣）

實價金貳拾五錢
郵稅金四錢

早稻田文學論じて曰く

「死の方へ」及び「幼き者」の二編を收む。共に最近文壇有數の佳作で、「死の方へ」に於ては此作者の描寫の圓熟と、ナイヒリスチックに傾きつゝある主觀の深さとを窺ふべく「幼き者」には運命の數奇に弄ばれて短き一生を父母ならぬ父母の間に終る幼兒の姿を見る。ヒューマンドキュメントとしてはた立派な藝術品とて推奬に値する。

638
92

338
92

092762-000-5

338-92

朝

田山　花袋／著

M45
DBQ-0043